

手塚治虫作品―その2『陽だまりの樹』―

萩原 義雄

歴史のなかに「タイムスリップ」

日本の江戸時代末期から明治時代へと変容する大きな流れの渦にあつて活躍する一人の医師、手塚良庵（後の良仙）の若き日々の一五一十の形勢を描きだす。長編歴史漫画を描き始める契機は、順天堂大學での講演と後日、日本医学界の深瀬泰且氏からの手紙であつた。この内容は「手塚さんの先祖は手塚良庵ではありませんか？」というもので、これに良庵に関わる一連の史料から彼が軍医であり、若き良庵を巡る幕末の人間模様をここに描き出そうと構想したのがこの作品の始まりであつた。手塚はこの講演のなかで「私の先祖は医者でした……」と語つたのである。この医者という職業から、手塚自身その血を受け継ぎ、医学の道を志したことをここで話したのである。その先祖こそが、この物語の主人公の一人である手塚良庵その人であつた。手塚は、この名前を手紙の文中で知り、正に動乱期の日本を真つ正面から見つめて行こうと決意したのである。とはいえ、「歴史物」であるからして、読者層も大人向けと成らざるを得ない。この作品は折しも手塚自身が手懸けていたコミック雑誌「ビッグ・コミック」に連載することになる。此の作品は丁度八番目に登場させている。

『陽だまりの樹』について

激動期幕末を舞台とするからには、歴史の忠実さと歴史上で名のある人物についても用意周到に史料を読みかえしておく必要がある。この上に漫画ならではの架空の人物像をも想定していくのである。手塚治虫は、吾が先祖である手塚良庵と彼に最も関わり合いを持つ人物として「伊武谷万二郎」という松平藩の下級武士を彼に絡めるのである。万二郎は父の隠居の祿継いで藩に出仕するようになってまだ四ヶ月、祿高は家臣のなかでは最も低い十五俵二人扶持の二十六歳の若武者である。

この物語の滑り出しは、まず巻頭の見開き部分に江戸市中の地図を描き、ここにオープニングのプロローグが書かれている。

江戸小石川、傳通院裏に人呼んで二百坂という路地があつた。本来三貂坂という地名であるのに、なぜ俗にこう呼ぶのかはわけがあつた。

この坂を上りきると、江戸市中の一等地なのであつて、親藩、譜代の大名達の江戸屋敷が軒を連ねて居を構えている。

江戸市中の大俯瞰を東西南北凡て見渡してから、風景の視線はやがて町の屋根屋根を伝わるようにして近づいてくる。やがて、人影を描き出す。この三百坂の江戸屋敷にある松平播磨守（後、「府中藩松平」と記載）の登城風景を悠々と描く。読者は一気に百三十年前のこの時代へとタイム・スリップすることになる。三百坂の中途を登城に供する徒歩の侍たちが勢いよく駆け出す。日頃の武士として鍛錬の出来映えの程を殿の御前で試す絶好の機会でもある。それも正装に身を固めた姿でもあつた。この先頭を切つて真つ先に登り切つた侍がこの「伊武谷万二郎」なのであつた。このとき、手塚治虫のご先祖である良庵さんは、供侍の駆けつっこを避けるようにして、坂の途中でじつとしてこの光景を見ているのだが、彼の顔つきは汗びっしょりになって駆け出すこの万二郎の姿を冷笑に見つめている。万二郎も毎朝同じように己の走る姿態をニヤニヤ見ているこの男が癪に触るが登城の公務である故どうすることもできないでいる。

この万二郎と良庵の二人が時に急接近する。或る夜の事である。万二郎の剣の師である千葉周作が急逝

する。この通夜の席で万二郎はいざいざを起こし、血気盛りの彼は清河八郎と真剣で勝負する。このとき怪我を負い、「三百坂の良仙先生」を呼びに行くが、生憎良仙は留守で代わって息子である良庵が代診に向かう。眼と眼が合うか合わないか、万二郎は当に猛獣のように傷のことも顧みず、傷の治療にやって来た良庵を投げ飛ばしてしまうのだ。この結果、良庵は大量に出血して氣絶してしまった万二郎の傷を縫合していく。彼にとつて万二郎は初めての外科手術を施した人物となつていく。この二人がこの長編歴史漫画の主人公として設定されているのである。身分も置かれた立場も性格も全く異なる二人が各々の遭遇する歴史的事件を通して実体験するのである。辛酸・苦悩・感動をこの二人の主人公を通して私たち読者は教科書に書かれた歴史を手塚の漫画のなかで見つめ直しさらに学ぶことになる。

下級武士の万二郎は、幕下のもと父と同様に誠心誠意仕えている侍である。だが、熱血漢と正義一徹の純朴さが他者との妥協をも許さず、世の処世術すら心得ようとしないう若者の一人なのだ。いつ生命を落とすか知れたものではない、暗闇を猛突進する。激動の渦巻く安隱の遠い世界が幕を開ける瞬間でもある。

蘭学医である良庵は、遊興三昧する。万二郎の生き方とは全く正反対のような若者である。蘭学をめざす若者は江戸を離れ、遠く大阪を経て長崎まで勉学の旅をすることも享保年間八代將軍吉宗が和蘭医学を学ぶことを奨励して当時としては世の習わしでもあった。ここで良庵は尊敬する適塾の塾長である**緒方洪庵**に弟子入りするのだが、その中途遊廓に立ち寄り居続ける有様である。結構凝り性のタイプなのである。一度決めたからにはとことん一つのことをやり遂げようとする。限られた時間で、限られた情報を頼りに蘭学をめざす。未知の領域に武者震いしながらもやがて医師としての技術能力を身につけ、その力を蓄積していくのである。將軍家御用を勤める漢方医たちからの差別や迫害にも負けずに新たな医療技術を学び、その普及と確立のために終始奮闘していく。その治療相手が行きずりの遊女であれ、つまらぬ諍事で深手を負った浪士であれ、生命の尊厳をもって真つ向から死と向かいあう。

この二人の主人公たちの行く手にはいつも幕府の腐敗しきった官僚達の自己保持システムがいつも重苦し程のしかかっている。

以下の「YouTube」動画は観るべきでできなくないです。

<http://www.youtube.com/watch?v=hnpND-oNbk0&feature=related>

<http://www.youtube.com/watch?v=ImTJzJ4uyM&feature=related>

<http://www.youtube.com/watch?v=Qv46eQOjdl&feature=related>

『陽だまりの樹』という書名

この作品名を説く場面がある。伊武谷万二郎が**山岡鉄太郎**〔後の**鉄舟**〕と一緒に水戸藩の碩学である**藤田東湖**〔小石川に蟄居を解かれ學校奉行の任につかれていた〕を訪れたときである。二人に東湖は、庭の桜の老木を指さし、「二巻、第10章天地鳴動・81頁」

これは、この富坂でも一番の老木だそう。なんでも家康公御入国の際、若木だったそう……つまりこの樹は、徳川三百年を生きてきたことになる。こは陽当たりもええし、風も強うない……。この桜は、ぬくぬくと三百年、太平の世に安泰を保ってきたわけじゃ。

わい。もうこれは十年もつまいて。徳川の世は、この陽だまりの桜の樹のようなものじゃ。太平の夢をむさぼるうちに、幕府の中にも外にも、白蟻共や木喰い虫共がわいて、樹を食いあらしおった。おのれの派閥だけを考えて、逃げ腰で無責任なくせに利をむしばむやから





合わせとその歴史のあり方についてである。あなた方はどのようにこの桜の老木見つめてみたのであろうか？

- ①害虫に蝕まれた老いた桜の樹など一刻も早く切り捨ててしまえばいい。
- ②放うつて置けば自然に倒れてしまうだろう。
- ③老木を生命続く限り活かすための延命處置を施そう。
- ④老木の桜の樹から実生の種を採って新しい生命を誕生させよう。
- ⑤其他……。

安政の大地震 以下の「YouTube」動画は観る事ができなくなっています。

<http://www.youtube.com/watch?v=yeMg5WGAuxI&feature=related>

<http://www.youtube.com/watch?v=51wKB4YDA3c&feature=related>

http://www.youtube.com/watch?v=_mz18Q4EQdU



十月二日 四ツ(午後十時)の刻
突然 江戸の東のかたを中心に
マグニチュード6・9の直下型地震が起こった
その瞬間 一万軒の家が崩壊し
十万人が下敷きになり
江戸市中三十か所から火の手が上がった！





この瓦版の原画をモチーフにして手塚治虫は、この作品中にアレンジメントしているが、この瓦版に書かれたその記述内容を手塚治虫自身がどのように読んでいたかが問われてくるのである。

少しく、この瓦版及びこの時代の記録資料を併わせて検証してみるとにしよう。

炎上する火の勢いは、手塚の作画は数十頁の天空まで届くものとなっている。このなかを逃げ惑う人々は逃げ行く方向を見極めて其の方向に足を運ぶ。右往左往する様相とは異なる。

このあたりをさらに見定めていく作業が必要となってくる。

「安政の三大地震」この時代の日本では、大地震が頻発している。

1, 一八五四(安政元)年

七月九日 安政伊賀地震：M 7.6、死者約1,800人、

十二月二十三日、安政東海地震：M 8.4、死者2,000～3,000人、

十二月二十四日、安政南海地震：M 8.4、死者2,000～3,000人

(上記の東海地震の僅か三十二時間後に発生。両地震・津波を合わせた死者を三万人だったという説もあり)

2, 一八五五(安政二年)

(新暦)十一月十一日、安政江戸地震：M 6.9、死者四三〇〇～四七〇〇人(一説には1,000人)

3, 一八五八(安政五年)年

四月九日、安政飛越地震：M 6.7、死者200～300人。

以上の大地震の被災を経た江戸・東京は、その後六十五年間に、一九二二(大正一一)年九月一日の関東大震災(大正関東地震)までは、大規模な地震に襲われていませんでした。

【注】 関東大震災の被害規模は、M 7.9、死者・行方不明者 105,385 人(日本災害史上最大)、負傷者 103,733 人、住家全半壊 254,499 戸、住家焼失 447,128 戸(全半壊後の焼失を含む)。

一八五五(安政二年)十月二日の午後十時ごろ、江戸に発生した地震で、市の中東部である下町付近に被害が集中しました事なども記されています。幕府の調査では、倒壊した家屋一万五千棟以上、死傷者八千人余とされています。

安政二年十月二日(一八五五年新暦で十一月十一日)夜四つ刻(十時頃)、江戸を大地震が襲った。嘉永のペリー来航から幕末と定義付けられるから、明治になる十三年前の幕末です。マグニチュードは六・九とされ、関東大震災よりは弱いですが、直下型なので大きな被害をもたらした。

『安政見聞誌』上巻(早稲田大学図書館蔵デジタル公開資料)には、地震の様子が次のように書かれている。

今年安政二年十月二日夜亥時。大地震ありて。大江戸近国四方廿里ばかりは。皆此の災にかかり。そが中にもとりわき大江戸市中を以て太酷といはんか。抑其地動の發するや地底に大炮の音の如き響ありて。忽地上激浪のうつ如く震動き。地裂天墮るかと思ふ。驚かれ。見るく百万の人家。倉庫神社佛寺。傾覆し。是が為に打殺されしもの。幾ばくといふ数をしらず。或は梁におされ或はくだけし柱にはさまれ。又瓦屋根。二階の下に。敷かれ土蔵の壁土に埋もれ。などしたる。男女老少。泣さけ

知に成功した事例の報告はないのだから、あるいはナマズが自然摂理の前兆を教えてくれるかは定かではない。

安政の大地震の後、「なまず絵」は地震除けのお守りとなつて、売れに売れていた。また、「こんなひどい災害が起こるのは政治が悪いからだ、世の中すべてを新しく変えよう」という世直しの考えが生まれ、「地震をきつかけに鯰が世直しをしてくれる」という願いも込められていたようである。「ナマズ絵」は、二〜三方月の間に二百から四百もの種類が刷られたともいわれている。安政大地震から世代がすっかりかわつて関東大震災が起きた。あれから世代もすっかりかわりました。もうそろそろかもしれない。「天災は忘れた頃にやってくる」と、関東か、ずれても静岡あたりまでと推定して他人ごとのように思っているが、地震だけは何処が震源地になるか、現況の地震予知機能ではわからないことである。